

A帯ワイヤレスマイク 新周波数対応機器試用 実績に関するレポート

Vol. 8
2015.06



電波法の改正により定められた「特定ラジオマイク(A型ワイヤレスマイク)」の新周波数帯への移行。「特定ラジオマイク(A型ワイヤレスマイク)」は2019年3月31日までに、ホワイトスペース帯(470~710MHz)／特定ラジオマイク専用帯(710~714MHz)／

1.2GHz帯(1240~1260MHz)のいずれかの帯域に移行しなければならぬ。しかし多くの使用者にとって、使い慣れた機材や旧周波数帯からの移行は、頭では理解していても、おいそれと実行できていないのが実情だろう。

そんな中、いち早く新周波数帯への移行を済ませたのが、新潟の放送局、BSN新潟放送だ。テレビ(JNN系列)とラジオ(JRN/NRN系列)、両方の放送を行うBSN新潟放送は、保有する31波のA帯ワイヤレス・システムを昨秋から段階的に新周波数帯に移行。今春には完全に新周波数帯への移行を完了し、外部での中継や局内での収録で新しいワイヤレス・システムをフル活用している。新周波数帯への移行を躊躇する放送局もまだ多い中で、同局はなぜいち早く移行を済ませたのか。その理由や、新周波数帯のワイヤレス・システムの使用感について、株式会社新潟放送 技術局 制作技術部部長代理の井上耕栄氏に話を伺ってみることにした。

■サテライト・スタジオ合わせて計31波のA帯ワイヤレス・システムを運用していたBSN新潟放送

——はじめに、BSN新潟放送さんの沿革をおしえていただけますか？

井上氏 新潟放送は1952年、ラジオ新潟(RNK)としてスタートしました。テレビ放送のスタートはその約6年後の1958年のことですね。テレビ放送に関しては現在、JNN系列ですが、ラジオ放送に関してはJRNとNRNのクロス・ネットとなっています。

放送するコンテンツは、ラジオに関してはほとんど自社制作のものですが、テレビに関しては夕方のニュースと毎週水曜日19:00~20:00のゴールデン枠のみが自社制作のもので、それ以外は基本的にJNN系列の番組を放送しています。週1日とはいえ、ローカル局がゴールデン枠で自社制作の番組を放送しているのは珍しいかもしれませんね。内容は地域密着型の情報番組で、視聴率は必ず10%を超える人気番組になっています。最近は一ラメン特集を制作して放送したところ、16%を超える視聴率を記録しました。

社屋に関しては、この本社は旧社屋を取り壊し、昭和63年に新築しました。また、一昨年新潟市万代のメディアシップビル内にサテライトスタジオを開設。現在、収録・生放送は本社スタジオとこのサテライトスタジオのどちらかで行われる事がほとんどです。



A型ワイヤレスマイクの新周波数帯移行関連の情報に関しては、(一社)700MHz利用推進協会のHPや、全国で実施しましたテスト会等におきましてお伝えしてまいりましたが、今回新機器を実際にお使い頂きました感想や周波数移行に関する率直な思いを伺える機会がございましたので、その内容を皆さんにお届けいたします。このレポートが、免許人の皆様において、周波数帯移行に関する手助けになれば幸いです。

一般社団法人700MHz利用推進協会

インタビュー：一般社団法人700MHz利用推進協会

——技術のスタッフや機材は、テレビとラジオで分かれているのでしょうか？

井上氏 技術のスタッフは外注しているんですが、音声に関してはテレビとラジオの両方をお願いしています。スタジオはテレビとラジオで完全に独立しており、持ち出し用の機材に関してはテレビとラジオで共有しています。

——BSN新潟放送さんは、ワイヤレス・システムの導入は早かった方ですか？

井上氏 そうですね。最初に導入したのは水銀電池の頃ですから、かなり昔のことになります。もちろん私が入社するよりも昔の30年以上前のことですね。やはり演出上の問題で、最初はテレビの現場で使われ始めたんです。当時は電池の持ちが悪く、雑音にも弱かったりして、思うように動作しなかったみたいですが、約20年前に導入したRAMSAのワイヤレス・マイクから一気に性能が上がり、音質もとても綺麗になりました。その頃から電池の持ちもかなり良くなりましたね。

——新周波数帯への移行前は、ワイヤレス・システムをどのような構成で運用していたのでしょうか？

井上氏 中継用とスタジオ用にはRAMSA、ピン・マイクのツー・ピース型はソニーのものを使用していました。ソニーのシステムに関しては当初、免許が要らず扱いに悩まなくていいという理由でB帯のものを使用していたのですが、やはり外に持っていくと混信の問題が発生することが何度かあったので、その後ソニーのA帯マイクを導入したんです。また、ポーカル用マイクとしてSHUREを2本、サテライト・スタジオ“メディアシップ”の開設時にA/B共用のソニーのデジタル・ワイヤレスを12本導入し、新周波数帯移行前はA帯ワイヤレス・マイクは計31波で運用していました。持ち出し用が11波、その他はスタジオ内で使用する据え置き型での運用です。

——新周波数帯への移行前は、トラブル無く運用できていた感じですか？

井上氏 そうですね。電池の持ちが問題になることもありませんでしたし、特にトラブル無く運用できていたと思います。

■歌用のマイクは音質を最優先しSENNHEISERのシステムを導入

——新周波数帯への移行の話が最初に持ち上がったのは、いつ頃でしょうか？

井上氏 一昨年5月、TBS様より、700MHz利用推進協会様とJNN系列で、周波数帯移行に関する合同説明会が開催されるとの案内があり、その会議に出席しました。その際にTBS様より、新周波数帯への移行に伴い、JNN系列の放送局で共通の認識を持ち、互いに協力してできるだけ早く移行しましょうとアナウンスがあったんです。私が新周波数帯への移行について真剣に考え始めたのはそのときからです。

——新周波数帯への移行の話を最初に聞いたとき、どのような印象を持ちましたか？

井上氏 正直、助かったなという気持ちが一番大きかったです(笑)。というのも、弊社で運用していたワイヤレス・システムは、古いものと20年選手だったので、買い替えが必要な時期になっていたんですよ。しかしワイヤレス・システムは、ビデオ・カメラなどと比べると遥かに安価とはいえず、まとめて更新しようと思うと数百万円になります。それくらいの額になると、社内で予算を通すのが大変なので、これは助かったなと思いましたよ。機材も経年劣化が進んで、メーカーですら原因が分からないトラブルが生じたりしていたところだったので、本当にタイミングが良かった。これは早く移行しない手はないなと思いましたね。

——とはいえ、新周波数帯での運用に対する不安もあったのではないのでしょうか？

井上氏 もちろん不安はありました。これまでの機材と同じように扱えるのだろうかとか。運用する前に必ず調査やテストは行わないとダメだなと思いましたね。でも、そのような不安よりも面倒だなと思ったのが、移行に関する手続きです。免許申請など事務手続きに関する人件費も心配でしたし、譲渡という形になった場合の税金関係の処理はどうなるんだろうとか。そのあたりがクリアできるのであれば、できるだけ早めに移行したいと思いました。今回のケースでは費用的な負担はほとんど無いので、社内での稟議も通りやすいと思いましたね。

——その後はデモ機のテストを始めたのですか？

井上氏 会社からは早いタイミングで承認を貰うことができたので、すぐに導入機材の選定に入りたかったんですが、まだ各社から新周波数帯に対応した製品が出揃ってなかったんですよ。ですからとりあえず、製品が出揃うまで待とうと。それまではTBS様から随時製品情報が共有されてきたので、じっくり情報を収集し、昨年2月に東京で行われたテスト会で最初の機材の選定を行いました。一昨年のInter BEEが終わった頃になると、各社の新周波数帯対応製品が出揃ったので、実際に試して選定することができたんです。

——テスト会で試されたときの印象はいかがでしたか？

井上氏 当然ですが、音質はメーカーによって違うなと感じましたね。中でもSENNHEISERのシステムは、噂で聞いていたとおり本当に素晴らしい音質だなと思いました。その後、デモ機をお借りして、実際のオンエアで試用したんですが、音声スタッフは皆その音の良さに驚いていましたね。

またMBS様で行われたJNN系列用テスト会では、音質だけでなく、ワイヤレス・システムとしての性能のチェックも行われました。例えば、マイクを手を持った状態でアンテナに背を向けながら離れていき、どこまで距離を飛ばすことができるのかとか。けっこうシビアなテストも行いましたね。いくつかの製品は、テスト会で不具合が判明したんですが、それをメーカーがすぐ改修してくれたりとか、かなり有意義な内容だったと思います。

——テスト会での印象を踏まえて、導入機材を選定したのですか？

井上氏 そうですね。弊社では、平成26年度中、つまり今年の3月31日までに移行を完了させるという目標を掲げ、機材の選定作業を進めました。

まず最初に導入を決めたのは、SENNHEISERのD9000と5000です。歌用マイクとして、テスト会での印象が他社製品より非常に良かったのと、これまで新潟の放送局でSENNHEISERのシステムを持っている局が無いこともあり、どうしても導入したいと思いました。SENNHEISERは、他社製品よりレコーディング/放送した演歌歌手のジェロさんが歌った音を聴いて、実用上ほぼ問題ないなと思いました。他の放送局様では、持ち運びしやすい5000の方が人気なのですが、せっかく新規購入できるなら、アナログではなくデジタルのD9000をメインに、SHUREの2波分の更新機として5000を導入しました。

一方、サテライト・スタジオの“メディアシップ”のワイヤレス・システムは一昨年導入したばかりのソニーのA/B共用デジタルだったので、それを同じソニー製で更新すると回収されることになるので、別メーカーのRAMSA

で更新し、それまでのソニーのデジタルをB帯専用機に改造することにしました。これにより、B帯のデジタルマイクが12波増え、現場でのマイクの使い回しが楽になりました。そしてスタジオ内で使用していたRAMSAをソニーの1.2GHz帯に更新したんです。

ですから新周波数帯のワイヤレス・システムの構成は、SENNHEISERのD9000がハンド・マイクで7波、SENNHEISERの5000がハンド・マイクで2波、ソニーの1.2GHz帯がハンド・マイク4波と2ピース6波、RAMSAがハンド・マイク6波と2ピース6波。合計の波数は移行前と同じ31波ですね。当初はすべて同じメーカーで統一しようかなとも思ったんですが、歌用のマイクでは音質を最優先に考え、また“メディアシップ”のソニーをB帯として活かすことを考えた結果、このような複数のメーカーが混在した形に落ち着きました。

——目標どおり平成26年度末までに移行は完了したのですか？

井上氏 予定どおり完了しました。SENNHEISERとRAMSAのシステムに関しては昨年10月頃には導入を完了し、ソニーに関しては一部の製品の発売が遅れていたため、今年の3月にすべてが揃いました。

■局としてのワイヤレスの運用方針を定めれば、新周波数帯への移行は速やかに行える

——既に現場で運用されていると思うのですが、その感想はいかがですか？

井上氏 ワイヤレス・システムとしての基本的な取り回しはこれまでと変わりませぬし、運用していて致命的なトラブルは今のところありません。ただ、一部の製品に関してはデフォルトのオート設定では電波があまり飛ばないので、設定を細かく行わないといけないという報告は受けています。これはテスト会でも感じたことなのですが、旧周波数帯と比べると、障害物に対して弱かったり、電波の飛びという部分ではまだ少し課題があるようです。もちろん、障害物が無ければまったく問題無いんですけどね。

ただ機材に関しては新しいので、使い勝手はかなり良くなっていますね。周波数などの設定を一括で変更できるようになっていたり、あとは電池の状態をブースから管理できるようになったのも嬉しいところです。

——お付き合いのある放送局の移行状況はいかがですか？

井上氏 新潟県内の局は、ほぼ移行が完了したのではないかと思います。皆さん運用波数がそれほど多いわけではないので、最初は“いずれは移行するけど急ぐ必要もない”という雰囲気だったんですけどね。もちろん、経理的な問題ですぐには移行できなかった局もあるようです。逆にTBS様のようにもの凄いく数のワイヤレス・システムを運用している放送局は、数年かけてじっくり移行していくようですね。時間はかかりますが、その都度新製品を導入できるので、そういった移行も悪くないのかもかもしれません。

——これから新周波数帯に移行する放送局に何かアドバイスがあればお願いします。

井上氏 社内で稟議を通したり、経理処理などにエネルギーを必要とするのは確かです。何か書類をやり取りする度に社長印が必要だったり……。しかし手間がかかると言っても、複数の人間で作業を手分けしてやると、余計にややこしくなるので担当者一人がすべての手続きをやるのがいいと思います。また、局としてワイヤレス・システムをどう運用していくのかという方針を決めていないと、機材の選定などに時間がかってしまう恐れもあります。弊社の場合は、歌用のマイクとして音質の良いSENNHEISERのシステムを導入するというのを最初に決定し、他のシステムに関してはどこでも安心して運用できる1.2GHzでいこうと決めたので、思っていたよりもずんわり機材を選定することができました。ですので、局としての方針を最初に定めた方がいいと思います。

しかし移行を完了した今では、終了促進を利用して早期に手続きを行ったのは非常に良い判断だったと思っています。最新鋭のワイヤレス・システムを導入することができましたし、結果として弊社にとってはメリットの方が大きかったですね。もちろん手続きで大変な部分もあるんですが、今も言ったとおり局内での運用方針を定め、700MHz利用推進協会様と密にやり取りすれば、移行はきっとスムーズに完了すると思います。